

ITSの実現に向けて

Toward the realization of ITS

取締役

八木 潔

Kiyoshi YAGI



ITSという言葉が世に出てから久しいが、ITS世界会議もすでに1994年の開催から16回を数えており、当社も初回からほぼ毎年参加して今年の第17回釜山大会に向け準備を進めている所である。当社でITSと名の付く組織は1996年のITS推進室の設立が出発点であり紆余曲折を得て2010年4月にITS技術本部としてITS製品開発を強化することをミッションに新スタートをきっている。「ITSとは」をITS-JAPANのホームページで見ると「最先端の情報通信技術を用いて人と道路とを情報でネットワークすることにより、交通事故や渋滞といった道路交通問題の解決を目的に構築する新しい交通システム」とされている。当初は九つの分野、20のサービスで説明されていたが、より広範囲にかつ目的が明確な定義となってきた。

このITSの定義を当社のVISIONである「クルマと社会をつなぐ」「クルマと人をつなぐ」「クルマとクルマ、クルマとインフラをつなぐ」という三つの分野の「ツナガル」機能でクルマの新しい価値を創造し、クルマ社会のイノベーションを進める」と比較してみるとITSの狙いは当社のVISIONの目指すところと合致していることに改めて気づかされる。まだまだ本格的なITS時代が到来したという実感をもっている人は少ないと思うが、各種実証実験も盛んに行なわれており、技術開発も研究フェーズから開発フェーズに移って本格的なITS時代の展望がやっと開けてきた段階であると感じている。

ITSとは対照的に、クラウドは数年前にでてきた言葉ではあるが、すでに実用化されておりスマートグリッドについても実用化に向けて実証実験、技術開発、標準化活動等が加速している。ITSはこれからやっと本格的な実現フェーズに入るといえるのだが、このスピードの差は一体どこにあるのだろうか。やはり安全（人命）に関わる事項しかも社会システムにも関わる事項が普及（実用化）するには大きな技術革新、経済状況、社会の認知などの後押し（タイミング）

が必要ということなのかもしれない。しかし、風が変わりそのタイミングが来たときにタイムリーに製品投入できるように技術開発を継続することは会社にとっても、技術者にとっても絶えず高いモチベーションを維持し努力し続けることを求められることになる。この点については当社の方針、VISIONが「つながる」「安心・安全」という方向でさらに明確にうちだされたことでモチベーションを維持しつつ開発を加速できる環境になったわけであり、技術開発陣はこれに成果で応えていくことが求められる。

さて2010年5月に富士通グループの総力を結集した「マルチアングルビジョン」の製品化を実現した。見えない（見えにくい）所を見やすく表示して安心して運転操作ができることを支援するシステムであるが、「安心・安全」には欠かせない画像技術（見る・見せる（処理する）・認識する）を活用した製品である。

この製品を軸にして、当社の特徴のひとつであるミリ波レーダとの融合で周辺監視の領域と精度を向上させ、将来的にはインフラ協調との融合として発展させて安全の一翼を担う周辺監視システムメーカーとして社会に貢献していきたいと考えている。さらには富士通グループの得意とするセンター、ネットワーク技術とも連携してより「安全に貢献するシステム」として発展していくものと確信している。

当社としてITSの広い分野で貢献できるのはまさに「ツナガル」と「人に優しいHMI」で安心・安全を提供することにあるといえる。このためにも、ITS事業領域に対応できる要素技術の開発を継続し、人材育成を伴いながら先行研究・先行開発にパワーシフトを行って新製品提案（開発）を行なうことがなによりも富士通テンの技術者に求められる使命であるということを絶えず認識していきたいものである。